

【学会報告】

The 2020 Yokohama Sport Conference (on-line) に参加して

梶山俊仁*¹



図 The 2020 Yokohama Sport Conference 公式ホームページ
「<https://www.yokohama2020.jp/promotional.html>」より引用

I. Epilogue

2020年9月8日(火)から22日(火)までの間、The 2020 Yokohama Sport Conference (会議公式ホームページ上での on-line 開催)に参加した状況について、私の臆げな記憶と公式ホームページを拠り所として報告する。1964年の東京オリンピックを機に4年ごとの大規模な国際スポーツ科学会議が開かれるようになり、近年では2008年・中国、2012年・英国、2016年・ブラジルと夏季オリンピック及びパラリンピック開催国に於いて催されている。今回もコロナ禍により延期された東京オリンピックとパラリンピックに併せて、体育・スポーツ・健康等に関わる国内で最大かつ総合的な学術団体である一般社団法人日本体育学会をはじめ、日本スポーツ体育健康科学学術連合(JAASPEHS)、日本学術会議健康・生活科学委員会健康・スポーツ科学分科会が主催者となり「多様な人々が共に生きる世界をめざして：体育・健康・スポーツ科学の貢献“Contributing to a Sustainable World”」をテーマとして新しい形のオンラインイベントが横浜で開催された。

II. Contents

以下、公式ホームページの記録に基づき本学会の主な概要を述べる。先ず基調講演は「The Contribution of “Empowerment Through Sport“ to a Sustainable World」と題してゲストスピーカー：マリアヌヌ・マイヤー氏(ベルン大学)が登壇し講演を行った。国連は2015年に「持続可能な開発のための2030計画」を採択することでスポーツを持続可能な発展の重要なイネーブラー(後援者)と位置づけた。人類の発展と平和の実現に対するスポーツの貢献度の増大は女性と若者、個人や地域社会が自立して力を蓄えることだけでなく、健康や教育等の問題解決にも貢献する。しかし、それは社会的、経済的、環境的な側面が考慮された場合に限りSDGsは達成可能であることを強調した。

受付日 2020.12.19

*1 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科

次に特別セッションとして「Covid-19 - Challenges and Responses」と題してモデレーターにデトレフ・デュモン氏 (ICSSPE エグゼクティブディレクター) がゲストスピーカーとして阿江通良氏 (2020年横浜スポーツ会議共同代表・ジェイパス会長・日本体育大学スポーツ文化学部教授)、ヘレン・キルケゴール氏 (デンマークスポーツ研究所)、サイモン・ダーネル氏 (トロント大学体育保健学部)、デビッド・レグ氏 (マウントロイヤル大学保健体育学部教授)、エリック・サントロン氏 (CEO FISU 事務局長)、スタンリー・ムトヤ氏 (アフリカ連合スポーツ評議会地域最高経営責任者) らが迎えられた。Covid-19の出現が世界的な影響を及ぼし、その存在は生命科学分野のすべてに影響を与えスポーツのみならず健康、教育に重要かつ新たな課題を与えている。パンデミックによって深刻な影響を受けているこれらの分野における課題を克服すべく活発に議論が交わされた。

続いて公開プログラム1として「Global “Changes” and “New Directions” in Physical Activity and Health: A Little Less Talk and a Lot More Actions」と題してミンカイ・チェン氏 (グローバル地域保健財団会長) がすべての国は「子供の肥満の問題」「身体活動の欠如」の危機を内包していることについてのレクチャーを行った。体育プログラムの「変更」を求め健康を維持する定期的な身体活動が、この困難な時期の各家族のための基本的な要件であることを示した。

更にパブリックプログラム2が「Sustainable physical activity/ sports promotion in the new normal with and after COVID-19」と題され3部構成で行われた。セッション1では「"WHO Global Action Plan on Physical Activity 2018-2030"」と題して世界保健機関 (WHO) ジュネーブ・スイスの健康増進省身体活動ユニットの責任者のフィオナ・ブル氏、セッション2では「～ Sport in Life ～ Japan's Initiatives for Sport for All」と題して日本スポーツ庁長官鈴木大地氏が登壇した。セッション3では「Physical activity/sports and COVID-19, and sustainable development goals」と題してブル博士、鈴木大地氏、ファシリテーターとして井上茂氏、大熊裕子氏が招かれニューノーマルについてのトークセッションが行われた。

一方、個別の研究発表に眼を転じると体育哲学、体育史、体育社会学、体育心理学、運動生理学、バイオメカニクス、体育経営管理、発育発達、測定評価、コーチング、保健、体育科教育学、スポーツ人類学、アダプテッド・スポーツ科学、介護福祉・健康づくりの各分野から当初は1300題の演題予定が最終的にはオーラル439題、ポスター619題の発表がそれぞれ行われた。この中で私は継続的に取り組んでいるラグビー・サッカー等に代表されるゴール型球技の研究において「タグラグビーにおける指導の課題—最大防御境界面「突破」に着目して—」を演題としてタグラグビーの学習課題の1つである最大防御境界面「突破」に着目し、その指導上の課題を抽出することを目的としたポスター発表を行った。

III. Prologue

終わりに既に様々な場面で語られているが、私のコロナ禍で開催された「新しい形のオンラインイベント (オンライン会議等)」のメリットとデメリットについて感想を記す。本学会は3密を避けるために止む無くオンラインでの開催であったが、その一番のメリットはシンプルに「非接触による安全の確保」であることに相違ない。また何と言っても交通費・宿泊費等の経済的、移動・当日発表準備等の時間的な負担がほぼゼロに軽減されたことは非常にありがたいことであった。更に通常の対面による発表であれば発表時間が限られる。しかし、オンラインでは各講演をはじめとしてポスターやオーラル発表を「ゆっくり」「丁寧に」「繰り返し」その内容を見聴きすることができる。加えてそこから双方向で複合的な繋がりが派生したことは新たな発見であった。一方、デメリットとしてはディスカッションにおいてその場の雰囲気はどうしても読み取りづらいことは否めない。当然だが学会は実際に現地に赴きその土地の空気・景色・発表者の声・会場の匂い・発表のプレッシャー等を五感により体感することが恐怖であるとともに、各地で味わう発表後のビールと仲間との交流は学会参加の醍醐味の1つであることは間違いない。またオンライン会議等はシステムの画質や音声品質、接続環境に影響を受けやすいこともデメリットとして挙げられる。

言うまでもなくスポーツ実技に代表されるリアル・ライブ感はスポーツ科学が他の学問領域と一線を画し独自性を示す Identity であり、我々の拠り所の 1 つである。図らずも今年は非対面・非接触によってリアル・ライブ感がスポーツ科学における教育者、研究者の原点であることを強く認識できた年となった。但しニューノーマルでのライフ・スタイルは不可逆的な変化であり、災いが過ぎても今回の経験は貴重なツール他として蓄積する所存である。当たり前のことが出来ることに感謝しつつ、後々健康スポーツ科学科にとって、この辛かった毎日が“疾風知勁草”の 1 年として笑えるように日々の教育と研究活動に邁進することを心に誓って今回の報告とする。